

通時的变化として見たサ行子音とザ行子音

榎木久薫¹

Consonant /s/ in sa-line and Consonant /z/ in za-line: A Diachronic Perspective

ENOKI Hisashige

キーワード: 通時的变化, 同化, 前鼻音, 閉鎖, 撥音, 濁音, 清音, 連濁

Keywords: Diachronic change, Assimilation, Prenasalized consonants, Closure, Mora nasal, Dakuon, Seion, Rendaku

1 はじめに

本稿は、現代日本語中央語で、サ行子音が前音環境の違いに関わらず摩擦音であるのに対して、ザ行子音が、休止の後及び撥音・促音の後で破擦音、母音の後で摩擦音になる傾向にあるとされる理由について、サ行子音とザ行子音の音声の通時の変化という観点から、新たな説明を試みるものである。

なお、ぞんざいな発音では、ザ行子音が、休止の後及び撥音・促音の後でも摩擦音で現れるという指摘が、高山倫明(2012)にある。このことについても併せて言及する。

2 音声学的説明

猪塚元・猪塚恵美子(2003)では、Q17に

このように撥音「ン (N/)」は、後ろに来る子音の調音点と同じ調音点を持つ鼻音に変化しているのです。ただし、後ろに何もなきときには口蓋垂鼻音で、後ろに母音・半母音・摩擦音が来るときには鼻母音になります。

と、撥音の口腔部分の調音は、後続音に同化すると理解出来る説明をしながら、Q10では、ザ行子音の音声について、

大まかにいうと、単語の最初(厳密にいうと「休止」のあとです。:脚注の説明)と撥音「ン」や促音「ッ」のあとでは破擦音、それ以外の語中では摩擦音になるという傾向があります。語

中にあるときは舌がどこにも触れないので、舌を触れない摩擦音になると考えればいいでしょう。語中とはいえ、ザ行の前の撥音「ン」は舌が歯茎に当たっているナ行の子音と同じ音なので、次のザ行は自然に破擦音になり、促音は休止のようなものなので破擦音になるわけです。と、撥音の後のザ行子音が破擦音になるのは、前にある撥音の調音への同化によると読み取れるような説明をしている。また、促音の後のザ行子音²については、促音の音声実体が休止と同じ無音なので、無音という前音環境に同化して破擦音になると読み取れるような説明をしている。

しかし、撥音・促音の音声実体については、城生佰太郎他編(2011)にも

【撥音の項】

撥音は、子音のみならず母音として実現されることもあり、その音声は様々である。その具体的音声は直後に来る音声の種類によって決まり、概して、(1)閉鎖を有する子音(破裂音、破擦音、鼻音)の前ではそれと同じ調音位置の鼻子音によって、(2)閉鎖を有しない音(摩擦音、接近音、母音)の前では鼻母音によって、(3)直後に音声が出来ないとき(必ずしも語末と等価でない点に注意)には口蓋垂鼻音 [N] によって実現される。(項筆者 高山知明)

【促音の項】

(1)直後に来る子音と同一の調音位置において、(2)その子音が(a)破裂音・破擦音の場合には閉鎖で、(b)摩擦音の場合には摩擦で実現される(項筆者 高山知明)

とある。このように、撥音の音声実体は口腔部の調音が後続音の調音に同化した鼻子音であり、促音の音声実体は後続の破裂音・破擦音・摩擦音の調音に同化した子音であるという理解が、調音音声学における標準的なものであろう。

このように、撥音・促音の音声実体が後続音に同化した音であるなら、撥音・促音自体は後続音の調音に影響を及ぼす前音環境ではないことになる。この点では、後続音に対して撥音・促音は、休止と同じ前音環境ということになる。従って、ザ行子音が撥音・促音の後で破擦音になる理由を、前の音声環境への同化に求める音声学的な説明は成り立たないということになる。

休止・撥音・促音が後続音の調音に影響を及ぼす前音環境ではないことを踏まえて、ザ行子音が休止・撥音・促音の後では破擦音、それ以外の語中では摩擦音になる傾向にあることを音声学的に解釈すれば、次のような説明が最も自然である。

ザ行子音のデフォルトの音声(本稿の論述の中では、子音の調音に影響を及ぼすような前音環境がなく、丁寧に発音された音声)は破擦音である。休止・撥音・促音の後でザ行子音が破擦音になるのは、前音環境が後続音の調音に影響を及ぼすものでないために後続子音がデフォルトの音声で現れたのであり、ザ行子音がそれ以外の語中で摩擦音になるのは、前の母音の調音に同化して閉鎖が弱まったためである。

このような解釈をせず、音声学的に無理のある説明をしようとするのは、「濁音は清音の子音を有声音にしたもの」という前提があるからと思われる。つまり、清音であるサ行音の子音が摩擦音であるから、その有声化音である濁音のザ行音の子音も摩擦音であるとする前提である。

この「濁音は清音の子音を有声音にしたもの」という認識は、連濁現象に基づくものと考えられ

2 この説明に対しては、高山倫明(2012)にも指摘がある。但し、高山の指摘は、ザ行子音が、語中(母音の後)で摩擦音、撥音の後で破擦音になるとすること自体が、鼻音の後は閉鎖という認識の強固さの現れ、という文脈でなされている。

る。しかし、現実の連濁における清音から濁音への交替のすべてが「濁音は清音の子音を有声音にしたもの」ではなく、清音と濁音の間に、子音の有声化以外の様々な音声のズレが見られる場合がある（「ハナ(花)」/hana/[hana] > 「クサバナ(草花)」/kusabana/[kusabana]）。少なくとも現代語では、連濁現象は、音声学的に説明のつく音声交替現象ではなく、語の複合に伴う語形の交替現象と見るべきものである（例えば「アメ(雨)」 > 「ハルサメ(春雨)」）。従って、現代語では、濁音の音声的性質を清音の音声的性質に基づいて規定するのは、不適切ということになる。サ・ザ行子音について言えば、サ行子音が摩擦音であるから、ザ行子音も摩擦音であると規定するのは不適切ということである。

3 清濁概念と音声実体のズレ

前節で述べたように、サ行子音とザ行子音の関係を共時的な音声交替として説明しようとするのは不適切なことを考える。本攷は、現代語の「清音」と「濁音」の子音音声の姿を、音声の通時的变化の結果と見なし、サ行音とザ行音の子音について、その通時的变化の過程を推論しようとするものである。

異論もあるが、本攷では、濁音は日本語史上ある時期に生まれた音という立場を取る。その濁音は、文献によって知ることの出来る最も古い日本語の段階で、「カキ(垣)」「カギ(鍵)」の如く、語の弁別に関与する音である。しかし、濁音が、語の弁別に関与する音素の異なりを越えて「濁音」という一つの音類と認識されていること、また「濁音」が「清音」と対の概念であることは、濁音の起源を連濁現象の発生に求める立場を支持するものと考えられる。

連濁は、語頭でカ・サ・タ・ハ行音であった音が、複合語の後部要素頭となった時、ガ・ザ・ダ・バ行音に交替する現象である（「ヒト(人)」 > 「タビヒト(旅人)」）。このように、語の複合によって交替した音が有標とされ、「濁音」とされる。また、連濁では音が交替するから、ガ・ザ・ダ・バ行音は、交替前のカ・サ・タ・ハ行音と対の音という認識が生じる。

そして、連濁は、その現象の生じた時代から現代まで、単独語で語頭に位置する「清音」が複合語の後部要素頭音になった時に、「濁音」に交替する現象であると理解されている。しかし、「清(音)」「濁(音)」は音を区別する際の概念・用語であって、その音声的内実を指定しているわけではない。前節で指摘したように、現代語では、清音と濁音の間に、子音の有声化以外の色々な音声のズレが見られる場合がある。

連濁における「清音」から「濁音」への交替が、現象の始発時点で、音声的に平行な音交替であったとしても、「清音」と「濁音」の音声の通時的变化が並行的なものでなければ、後には、連濁における「清音」と「濁音」の交替は、音声交替としてみれば、ズレたものになってしまう。サ・ザ行子音について言えば、サ行子音が摩擦音であり、ザ行子音が休止・撥音・促音の後では破擦音、母音の後では摩擦音になる傾向にあるとされる理由も、清濁が分化し、その後サ行子音とザ行子音が通時的に異なる音声変化を辿って現代語の音声に至ったという観点から、説明することが出来るであろう。

4 濁音と撥音の起源についての仮説

ザ行子音の音声バリエーションの形成に関与する前音環境は、母音・休止・撥音・促音である。この内、休止と促音とは史的には後に加わった前音環境と考えられる。前音環境が休止とは、濁音

が語頭に位置するということが、濁音が語頭に位置するのは、借用語（漢文からの借用語である字音語と、西洋語からの借用語である所謂外来語）と、後の音変化によって語頭に濁音が位置するようになった固有語（「出る・出す」など）である。また、促音が濁音の前にある語は、日本語の語彙の中では、西洋語系の借用語のみである。

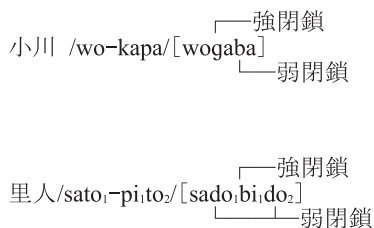
そこで本節では、先ず、当該の問題について音声の通時的変化の観点から説明するために有効と考えられる、濁音と撥音の起源について肥爪周二(2003)に提示された仮説を示す。それを出発点として、以降の清音と濁音の通時的音声変化について、考察のための手掛りの多いハ行子音とバ行子音の変化の過程を推定し、それを踏まえて、サ行子音とザ行子音の通時的音声変化の過程を推定する。そして、その推定に基づいて、現代日本語中央語のサ行子音とザ行子音の音声の状態について解釈を加える。

4.1 濁音の起源についての仮説

ロドリゲス『日本大文典』の記述から、室町時代末期の中央語において、濁音はその前に鼻音を伴っていたことが明らかであり、それは上代語にまで遡り得るものと考えられている。これを踏まえ、更に、古代日本語では、濁音を他の音から弁別する特徴は、阻害音系子音の有声/無声ではなく、前鼻音の有/無であったという仮説が示されている。そして、その清音と濁音との区別は、連濁によって生じたという仮説がある。肥爪周二(2003)に示されている濁音（連濁）の起源についての仮説は次のようなものである。

清濁の音韻的対立が存在しない、すなわち阻害音のグループに有声・無声の対立がない状態（アイヌ語のような状態）においては、諸言語の例から考えて、阻害音は、語頭で無声音、母音間で有声音という異音分布をなしていたと考えても不自然ではない（川/kapa/[kaba], 人/pi₁to₂/[pi₁do₂]）。そして、この有声化によって、語としてのまとまりが音声的に標示されることになる。複合語においても、この有声化によって結合標示がなされることになろう（小川/wokapa/[wogaba], 里人/sato₁-pi₁to₂/[sado₁bi₁do₂]）。しかし、古代日本語のように、単音節語が豊富に存在し活力を保っている状態においては、どのように語の内部を区切っても、それぞれが何らかの意味を有する単位になりやすく、語構成が不明瞭化するおそれがあるので、同時に内部境界の位置を明示することができたら便利である。

そのための一つの方法として、子音の閉鎖の強弱によって、語構成を標示するということが考えられる。（弱閉鎖は摩擦音化しても構わない。サ行子音は強閉鎖の状態では破擦音であったと考える）。



そして、この差異を音声的により明瞭に発音するためには、強閉鎖の継続時間を延長して、

複合語の内部境界を強調するのが、最も簡単な方法である。しかし、閉鎖の継続時間がある限度を超えた場合、そのままでは声帯の振動を維持するのが不可能になってしまう。例えば、現代共通語の「すっごく」は、通常[süggoku], [süg:oku]などと音声表記されるが、実際には促音部分において声帯の振動を一旦停止せざるをえないことを考えてみるとよい。

もちろん、内部境界標示のための有声破裂音・破擦音の閉鎖部を延長する際、声帯振動の継続による結合標示を放棄し、声帯の振動を素直に停止させるという方法が一方にはある。しかし、この方法は、「やまかは（山や川）/yama-kapa/[jamaggaba ~ jama-kkaba ~ jama-kaba]のような同格型の複合語や、「やちまた（八街）/ya-timata/[jaddimada ~ jattimada ~ ja-timada]のように後項があらかじめ複合語である、右分かれ型の複合語の場合など、相対的に大きな切れ目を含む結合部のみ適用されたと考えておく。

これに対して、閉鎖を保ったまま、結合標示のための声帯振動を維持するには、以下の方法が考えられる。（例示は現代語の「すっごく」「ひっでー」「やっぺー」より変形したもので、今扱っている問題とは直接関係ない）。

①側面に呼気を抜く。例 [süɽgoku] [çilde:] ×

②鼻腔に呼気を抜く。例 [süŋgoku] [çinde:] [jambe:]

口蓋帆を下げて鼻腔に呼気を抜く調音運動は、ナ行・マ行子音において存在したが、側面に呼気を抜く調音運動は一般的ではなかったはずであるので、②の方法が日本語話者の調音習慣に相対的に馴染みやすかったのであろう。また、①の方法では、両唇音（ハ行音）に適用できなかった。

このような経緯で、「小川」[wongaba], 「里人」[sado.mbi.do]のごとく、複合語の内部境界に前鼻音が発達し、これこそが、「非鼻音／鼻音」という形での清濁の対立の発生、及び連濁現象の起源であったと推定する。

以上に示した肥爪の仮説の内、本稿の考察において重要な点は次の二つである。

- 1) 清濁分化の当初、単独語の語頭の清音の子音と、複合語の後部要素頭音である濁音における前鼻音の後の子音とは、調音を共有し声の有無のみが異なる対の音であった。
- 2) 濁音における前鼻音は、複合語の内部境界を強調するための強閉鎖の継続時間を延長することによって生まれたものである。

4.2 撥音の起源について

肥爪周二(2003)では撥音の起源について、濁音の起源について提示した仮説を踏まえ、促音の起源と併せて、次のような仮説が示されている。

本稿では、この促音便・撥音便を生ぜしめた「下地」として、現代語の「すっごく」「すんごく」「ねっとり」「ほんのり」等に連なるような、強度強調・表情付加のための発音待機としての閉鎖延長、および前節で扱った複合語の内部境界標示のための閉鎖延長（現代語の「あかっぱじ」「ねこっかぶり」等の促音挿入形も同じ原理によるもの）を考えている。つまり、声帯の振動が停止する強閉鎖（閉鎖延長）と、声帯の振動が継続する強閉鎖（閉鎖延長）との、それぞれの延長部を分節化したのが促音・撥音であったと考えるのである（撥音で鼻腔に呼気が抜けるのは、声帯振動を維持するための副次的なことと考える）。前節との関係で言えば、〈非連濁②〉の延長線上に促音挿入があり、〈連濁〉（およびナ行・マ行子音の強調）の延長

線上に撥音挿入がある（注11 「ふんわり」「やんわり」「ぼんやり」等の接近音の前の撥音挿入は、かなり時代が下ってからのものようである。）と考えることになる〈表1〉。

〈表1〉〈カ行（ガ行）子音の音声を例示する〉

	声帯振動停止	声帯振動継続	
弱閉鎖 (通常閉鎖)		[-g-~-ɣ-] 非連濁①	連濁形よりも結合度の高い非連濁形(有声化+前鼻音不発達〈非連濁①〉)
強閉鎖 (閉鎖延長)	[-gg-~-kk-~-k-] 非連濁②	[-ŋg-] 連濁	連濁形よりも結合度の低い非連濁形(非有声化〈非連濁②〉)
延長部を 分節化	[-gg-~-kk-] 促音挿入+清音	[-ŋg-] 撥音挿入+濁音	

肥爪の仮説によれば、撥音・促音は、複合語の内部境界標示のための鼻音及び無声破裂音・破擦音を「下地」として生まれ、その分節化されたものである。このことによって、撥音・促音は、「下地」としての複合語の内部境界標示のための鼻音及び無声破裂音・破擦音と同じく、音声的には後続音の拡張音、つまり撥音の場合は、後続の有声阻害音（と鼻音）と口腔部の調音を同じくする鼻音、促音は後続の無声阻害音と同じ音になる。

また、肥爪周二(2003)では、上の記述の後、次の指摘がなされている。

現代語においても「あかっぱじ」「おとこっぷり」「まっつあお」「どっちらけ」のように、促音の後の摩擦音が破裂音・破擦音で現れることがあるのは、「促音挿入」が強閉鎖の延長線上にあるからであると説明できる。

本稿は、撥音・促音の起源についての肥爪の仮説との関係で言えば、肥爪が「促音の後の摩擦音が破裂音・破擦音で現れることがある」と簡略に指摘している点について、促音と共通する音声的性質を持つ撥音に基づいて、通時的な音声変化という観点から説明を試みようとするものということになる。

5 清音と濁音の子音音声の通時的変化

以上二つの仮説を踏まえ、清音と濁音の子音音声の通時的変化について、まず考察の手掛りの多いハ・バ行子音について考察を加え、その結果がサ・ザ行子音の音声の通時的変化の推定にどのように適用できるかを考察する。

5.1 ハ行子音とバ行子音

ハ行の子音は、キリシタン資料によって室町末期には無声摩擦音[Φ]であったことが知られ、更に遡れば、無声破裂音[P]であったと推定される。一方、現代語中央語のバ行の子音は有声破裂音[b]である。

濁音の起源についての肥爪の仮説に基づけば、清濁が分化する前、ハ行子音は、語頭では無声破裂音[P]、語中では有声破裂音[b]であった。複合語の内部境界標示のための強閉鎖・閉鎖延長によって、複合語の後部要素頭に、前鼻音を伴った有声破裂音[mb]が生まれた。これを子音部に持つ音節がバ行音（濁音）である。

このようにして生まれた清濁の対立で、バ行音（濁音）の子音は [mb]（前鼻音を伴った有声破

裂音)、ハ行音(清音)の子音は語頭で[P](無声破裂音)、語中で[b](有声破裂音)となった。

ところが、ハ行の子音は、「唇音退化」と呼ばれる音声変化によって、語頭の無声破裂音[P]は閉鎖が弱体化して無声摩擦音[ɸ]となり、ハ・ヒ・ヘ・ホについては、更に調音点が後ろに移動してヒ[c]ハ・ヘ・ホ[h]となった。

これに対して、語中のハ行子音を肥爪の仮説が前提としているように有声破裂音[b]であったとするならば、語中のハ行子音は、語頭の無声破裂音[P]と並行的に閉鎖が弱体化して、恐らくは有声摩擦音[B]から更に接近音[w]に変わり、その結果、語中のハ行音は既存のワ行音に合流することになった。「ハ行転呼」と呼ばれる音韻変化の現象は、このように説明されることになる。

一方、バ行子音は、現代語で、母音の後で有声摩擦音[B]になることがあるが、休止・撥音・促音の後では有声破裂音[b]である。これは、ハ行子音とバ行子音とでは、通時的な音声変化が並行していなかったことによると考えられる。肥爪の仮説に基づけば、ハ行子音(語頭で無声破裂音[P]・語中で有声破裂音[b])の閉鎖が弱体化(唇音退化)して行く時期に、バ行子音が前鼻音を伴った有声破裂音[mb]であったことによって、閉鎖の弱体化を起こさなかったものと推定される。

その理由は、次のように説明することが出来る。

肥爪の、濁音の起源についての仮説に基づけば、濁音の前に鼻音が発達するのは、有声阻害音の閉鎖を強調する一方法として、閉鎖の継続時間を延長したためである。濁音の前の鼻音は後続の子音と閉鎖という調音を共有するが、これが、後続子音の閉鎖の強調のためであったとすれば、そのような鼻音が前に存在する間は、[b]の閉鎖の調音が弱体化することはない。このことによって、鼻音の後の[b]は閉鎖が維持されることになる。

このような濁音における前鼻音を下地として生まれた撥音でも、後続のバ行子音は閉鎖の調音が維持されることになる。

後に濁音における前鼻音が中央語で衰退すると、バ行子音の音声は前鼻音を伴わない有声破裂音になる。バ行子音が前鼻音を伴わない有声破裂音になると、前音環境が母音の場合、後の有声破裂音は母音の調音の影響を受け、閉鎖が弱体化した有声摩擦音になる傾向を示すことになる。

一方、前音環境が撥音の場合、撥音は音声的には後続の有声阻害音・鼻音を延長した音であり、口音・鼻音の違い以外の口腔部の調音は後続子音に同化しているので、後続子音の調音に影響を与えることはなかった。このことによって、バ行音について言えば、前に撥音がある場合、バ行子音はデフォルトの音である有声破裂音が維持されることになる。

前音環境としての休止と促音とは、先述の如く、史的には後に加わったものと考えられる。このうち、促音については4.2節で述べた如く、後続の子音の調音をそのまま延長した音であり、後続音の調音に影響を及ぼす音ではない。休止の後には、前に音がないのだから、後続子音の調音に影響を受けることはない。従って、促音・休止の後のバ行子音は、撥音の場合と同じくデフォルトの音声である有声破裂音となる。

無論、前音環境への同化とは関わりなく、ぞんざいな発音などにおいてバ行子音の閉鎖が弱体化すれば、前音環境が休止・撥音・促音であっても摩擦音[B]が現れることはあり得る。休止・撥音・促音は後続音の調音に影響を及ぼす前音環境ではないから、当然そういうことになる。

5.2 サ行子音とザ行子音

サ行の子音については、古代日本語において破擦音であったという推定がある。この推定に従え

ば、現代語のサ行子音が摩擦音であるのは、破擦音>摩擦音という閉鎖の弱化的音声変化の結果ということになる。この音声変化は、ハ行子音に起こった「唇音退化」と同じ現象と見ることが出来る。この前提に立ち、前節のハ・バ行子音の音声の通時的変化についての考察と照し合わせながら、サ・ザ行子音の音声の通時的変化を推測すると次のようになる。

清濁が分化する前、サ行子音は、語頭では無声破擦音[ts ~ tʃ]、母音間では有声破擦音[dz ~ dʒ]であった。連濁現象が生じると、複合語の後部要素頭に現れるザ行音（濁音）の子音は、複合語の内部境界標示のための強閉鎖とその強調のための閉鎖延長としての前鼻音を伴う[ndz ~ ndʒ]となる。ザ行子音に前鼻音が伴う間、その後の子音は破擦の調音が維持される。

また、前音環境が撥音の場合も、後続のザ行子音は破擦の調音が維持されることになる。

一方、サ行子音は語頭の無声破擦音も語中の有声破擦音も閉鎖が弱体化して、摩擦音になって行く。但し、語中のサ行子音は有声摩擦音になっても、語中のハ行子音のように合流する既存の音素がなかったため、音韻レベルではサ行子音とされ、後に語中の清音の子音が無声化するのに伴い、無声摩擦音となっていった。

これに対して、ザ行子音が前鼻音を伴わない有声破擦音になると、前音環境が母音の場合、後の有声破擦音は母音の調音の影響を受け、閉鎖が弱体化した有声摩擦音になる傾向を示す。

一方、前音環境が撥音の場合は、ザ行子音はデフォルトの音である有声破裂音が維持されることになる。また前音環境が促音・休止の場合、後のザ行子音は、撥音の場合と同じくデフォルトの音声である有声破擦音となる。

ぞんざいな発音などにおいてザ行子音の閉鎖が弱体化すれば、前音環境が休止・撥音・促音であっても摩擦音[z ~ ʒ]が現れることはあり得る。

以上が、現代日本語中央語で、ザ行子音が、休止の後及び撥音・促音の後で破擦音、母音の後で摩擦音になる傾向にあるとされる理由についての、本稿の立場での解釈である。

6 前鼻音と後続子音との関係

前鼻音は後続子音の閉鎖に関与するかという議論がある³。本稿の立場では、濁音における前鼻音は後続子音の閉鎖に関与する。その関与とは、濁音における前鼻音が後続の阻害音系子音の閉鎖の調音の強調であることによって、その前鼻音は、阻害音系子音の閉鎖の調音の弱体化という通時的音変化を抑止するというものである。このことによって、濁音が前鼻音を伴う限り、前鼻音の後の阻害音系子音の閉鎖の調音は維持されることになる。

撥音は音便などによって生じるものであって、濁音における前鼻音とは生まれが異なるが、撥音が濁音における前鼻音を下地として生じたものであるなら、濁音が前鼻音を伴う限り、撥音の後の濁音も閉鎖の調音が維持されることになる。

濁音に前鼻音が伴わなくなると、濁音における阻害音系子音の閉鎖の調音は弛む可能性が生じる。それが、「現代日本語中央語のザ行子音が、休止の後及び撥音・促音の後で破擦音、母音の後で摩擦音になる傾向にある」というものであるのは、母音という口腔開放の音の後で、閉鎖の調音が弛みやすいからということになる。これに対して、撥音・促音の後で休止の場合と同じく阻害音系の

3 高山知明(2014)。これ以前の議論については、同書に整理がある。

子音が現れる傾向にあるのは、撥音・促音がどちらも後続音の拡張音であって、その調音（撥音の場合の鼻音化を除いて）は後続音の調音に同化しており、後続音の調音に影響を及ぼすものではないからである⁴。従って、前音環境とは関係なく、濁音の子音の閉鎖の調音が弛むことがあれば、撥音の後でも濁音の子音が摩擦音で現れることはあり得る。1節で触れた高山倫明(2012)の指摘は、このことを言ったものと考えられる。

撥音が濁音における前鼻音を下地として生まれた音素であれば、撥音の後の子音は、阻害音系の有声子音（ガ・ザ・ダ・バ行子音）ということになる（古代語の固有語では、これに加えて鼻子音（ナ・マ行子音）があった）。しかし、字音語を借用語として日本語の中に受け入れる際、鼻音韻尾（音節末の鼻子音）を撥音として受け入れるならば、字音語においては、撥音の後の音に限定はないことになる（オノマトペまで含めれば、固有語であっても「ふんわり」や「ぼんやり」のように撥音の後に接近音が位置することがあり得るが、ここでは措く）。しかしそうなっても、撥音が後続音と口腔部の調音を同じくする鼻音である点は、固有語の撥音と後続子音との関係と同じである。そうであれば、母音や接近音の前の撥音は口腔閉鎖の調音を持たないことになる。このような撥音においては、前鼻音が後続音の閉鎖に関与するとは言えないことになる。

しかし、固有語の濁音が前鼻音を伴う音である限り、字音語であっても、撥音として受け入れた鼻音韻尾の後の音が阻害音系の有声子音（ガ・ザ・ダ・バ行音）と鼻子音（ナ・マ行音）である限り、撥音は口腔閉鎖の調音を持ち、後続の阻害音系子音の閉鎖の調音を維持することに関与する。

7 まとめ

以上論じたことを一般化してまとめれば、次のようになる。

現代日本語中央語において清濁の対のある音節の子音で、清音の子音と濁音の子音の、有声／無声の違いを除いた口腔部の調音が異なる場合、濁音の子音の方が古形を留めている。濁音の子音の音声にバリエーションがある場合は、休止・撥音・促音の後の音が最も古形に近い。

参考文献

- 猪塚元・猪塚恵美子(2003)『日本語音声学のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る②) 研究社
 小倉肇(1998)「サ行子音の歴史」『国語学』195 国語学会 (小倉肇 2011『日本語音韻史論考』和泉書院 所収)
 城生佰太郎他編(2011)『音声学基本事典』勉誠出版
 高山知明(2014)『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』笠間書院 第7章「二つの変化の干渉」
 高山倫明(2012)『日本語音韻史の研究』ひつじ書房 第6章「四つ仮名と前鼻音」
 肥爪周二(2003)「清濁分化と促音・撥音」『国語学』213 国語学会

(2016年1月29日受付, 2016年2月3日受理)

4 濁音の前鼻音や撥音が音声的に鼻音であることだけに注目し、鼻音の後続音への影響を考えるのは、濁音の前鼻音や撥音の音声的性質の重要な点を見逃しているということになる。濁音の前鼻音や撥音は口腔部の調音に関する限り、後続音の調音に同化したものであるから、その音が、後続音の少なくとも口腔部の調音に影響を及ぼすことはない。